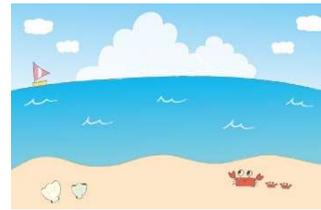


研究所だより

第473号
2024年 7月 3日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015

“ 松原遠く 消ゆるところ 白帆の影は 浮かぶ
干網浜に 高くして かもめは 低く波に飛ぶ
見よ 風の家 見よ 風の家 ”
『海』 1913年(大正2年) 文部省唱歌



はんげしょう ～ 半夏生 ～

半夏生とは、夏至(6/21)から数えて11日目の7月2日から七夕(7/7)までの5日間をいいます。「半夏(はんげ)というサトイモ科の薬草が生える頃ですよ」ということを知らせる雑節のひとつです。半夏(が)生(える)から「半夏生」と呼ばれている訳です。諸説ありますが、農作物の大切な目安として田植えは夏至のあと半夏生に入る前までに終わらせるのが良いと言われていたそうです。

蒸し暑さが続いておりますので、熱中症対策や食品管理に注意しながら、基本的な感染予防対策も心がけてお過ごしください。

「ほめる」を考える・3 トラウマのある子どもをほめるうえでの留意点

「指導と評価」6月号より

同志社大学カウンセリングセンター
京田辺校チーフカウンセラー

なかむら ゆうご
中村 有吾

1 ト라우マとは？

トラウマとは、極度のストレスを伴う出来事に遭遇し、心や身体に深刻な影響を受ける状態を指します。ストレスを伴う出来事は、虐待、いじめ、災害、貧困や複雑な家庭環境などさまざまですが、すべての子どもがこれらの出来事からトラウマになるわけではありません。もともと、柔軟性がある、ストレスに強い、養育者や学校、友達からあたたかい支援を受けているといった子どもは、出来事から受ける影響を軽減できることもあります。

トラウマは、腹痛や頭痛などの身体的な不調、周囲の言動への過敏な反応、衝動的な言動、対人関係のトラブルなど、さまざまな形で表現されます。保健室への頻繁な訪問、クラスで浮いている、暴力や反抗的な態度、平気でうそをつくなどの行動から、問題行動を頻繁に起こす「手を焼く子」とみなされがちですが、トラウマのサインとなる場合があります。

2 ほめるポイントが見つからない

前述のような行動から多くの先生が直面する課題の一つが、ほめるべき点を見つけ出すことです。このような場合に教師が重視すべきことは、「困った子ども困っている子ども」という視点です。子どもの背景や状況を理解し、共感しようとする先生の態度は、本人のみならずクラス全体にも伝わり、信頼関係の基礎となります。一人で対応がむずかしい場合は、ほかの教師やスクールカウンセラーと協力し、多面的に理解することが望ましいです。

愛情や適切な教育の機会が不足している家庭環境で育った子どもを想像してみてください。理想的な家庭環境では、子どもは存在するだけで価値が認められ、何かをやり遂げたときにほめられて成長します。一方、このような環境に恵まれなかった子どもは、適切に注目を集める方法や人間関係のスキルを

習得する機会が少なくなります。養育者の「それは怖かったね」といった共感や感情のサポートの不足から、暴力や大声、逃避行動などでしか表現できなくなります。

また、養育者から、頻繁に怒られたり、無視されたりすると、自己評価の低下、自己理解の乏しさ、あきらめや無力感が生じることもあります。そのため、「ちゃんとしなさい!」との注意にも、「どうしてよいかわからない」「先生は理解してくれない」と感じる場合があります。



トラウマのある子どもが常に問題を起こすわけではありません。人と仲のよい関係を築いたり、困難を乗り越えている場合もあります。これらの瞬間に注目し、具体的に行動をほめることは、怒られることの多い子どもには有益です。「今日は怒らずにうまく対処したね」と事実を伝え、どのようにそれができたのか尋ねることで、成功体験を振り返り、自身の工夫点を認識する機会を得ます。ちいさな努力の積み重ねが結果にむすびつく経験をすることで、意欲が徐々に芽生えてきます。

通常、子どもは無意識に工夫しており、最初はそれを自分で理解するのはむずかしいものです。反復して振り返ることで、「今日は怒らないように心がけた」といった自身の工夫を徐々に認識するようになります。自己理解が深まれば、ほかの場面でも同じ工夫を活用できます。万能な方法はなく失敗もありますが、試み自体をほめることが大切です。

こうした振り返りの作業は、子どもの健全な自己評価の発達を促します。健全な自己評価は、「イライラしたけど、よく我慢した」と、自分自身をほめることを促し、他者の評価に依存しない内面の成長へとつながります。

3 ほめたが、期待した反応がなかった

ほめても、子どもから明確な反応を得られないことがあります。また、ほめられることに不快感を示す子どももいます。このように期待した反応が得られない理由には、どのような背景があるのでしょうか。

一つの背景として、養育者との愛着関係の問題があります。愛着に問題があると、自分の価値や愛される資格についての不安や疑問をもち、自尊心に悪影響を及ぼすことがあります。自尊心が低い場合、教師のほめ言葉「自分はほめられるべき人間ではない」と否定的に捉えたり、「ほめられると、次も同様にうまくやらないといけな」とプレッシャーを抱えたりすることがあります。

愛着の問題は人間関係にも悪影響を及ぼし、子どもが大人を信頼することをむずかしくさせます。その結果、自分が理解されていないと感じ、教師からのほめ言葉を疑うことがあります。

加えて、叱られることが多くほめられる機会が少ない養育環境の子どもは、ほめられることに慣れておらず、養育者の要求水準が高いです。子どもも自身の合格基準を高く設定し、ほめられても「ほめられるほどのことでない」と感じたり、どのように反応すべきかわからない場合があります。このような状況では、結果だけでなく、結果にいたる子どもの取組や努力など、養育者と異なる視点からほめ方を試すと効果的です。



4 「怒る」との違いを理解する

子どもが教師からのほめ言葉をどのように捉えるかには、子どもと教師の関係も大きく影響します。特に対人関係にトラウマのある子どもは、対人不信が強いため、信頼関係をつくることは欠かせません。

子どもの考え方や行動、趣向だけでなく、問題行動の背景を深く理解することは信頼関係を築くうえで重要です。これを実現するためには、子どもの意見や感情を尊重し、耳を傾ける必要があります。安心で表現しやすい環境をつくることで、子どもは教師を信頼し、徐々に心を開くようになります。子どもとの約束を守り、子どもを尊重し、公平で理解ある態度を維持することも、信頼関係を築くために大切です。対人不信のある子どもは、目の前の人を本当に信頼できるかを確認するために、周囲の言動に敏感になりやすいものです。教師の一貫した態度は、こうした子どもに安心感を与えます。

